



7.26 Renewal



THE HOKKAIDO UNIVERSITY MUSEUM

7月26日、総合博物館リニューアルオープン

CONTENTS

-
- 01 総合博物館リニューアルオープンに向けて
-
- 02 水産科学館長就任挨拶 —水産科学館の歩み
-
- 03 特集 研究紹介(2)
-
- 08 2015年度
北大総合博物館年次報告会
-
- 09 タイ王国科学技術博覧会2015での企画展示
-
- 11 卒論ポスター発表会
-
- 14 水産科学館 水産生物標本館の竣工式
-



総合博物館リニューアルオープンに向けて



リニューアルオープンを告知する看板

総合博物館は昨年4月から全面休館していましたが、まもなくリニューアルオープンを迎えます。今回の休館は、博物館建物(旧理学部本館)の耐震改修工事に伴うものであります。しかし、我々は今回の休館を好機として、展示内容の見直しと博物館内部の再編を試みました。予算的・人的制約があり、大変な作業ではありましたが、なんとかオープンを迎えることができそうで安堵しています。これも博物館スタッフ、学生・院生、さらに博物館ボランティアの方々の献身的な努力、そしてご協力いただいた大学当局、理学研究院をはじめとする関係各位のご理解の賜物であります。そして忘れてはならないのが、当館の新しいプロジェクト「知の交差点」にご協賛いただいた方々です。ここに皆様に深く感謝いたします。

今回のリニューアルにおいて、我々は2つのアピールポイントを打ち出しています。まず博

物館が北大の魅力これまで以上に広く発信していく、広告塔の役割を果たすことを目指します。そのために今回新たに北大の全12学部の紹介を行う「北大の学び舎」展示を設けました。ここでは各学部の歴史・教育および研究内容の展示に加え、各学部の「一押し研究」を紹介することで、博物館を訪れる市民の方々や学生、特に高校生に北大の魅力を発信していきたいと思っております。いわば「365日オープンキャンパス」でしょうか。また北大全体でアピールする研究を展示する「挑戦する北大」展示も設け、特に最近力をいれている産学連携研究とともに、北大の底力をお見せしたいと考えています。

もうひとつのポイントは、これまでに以上に、市民・社会に開かれた博物館を目指すことにあります。そのために展示方法にも工夫をこらし、展示物に触れられるハンズオン展示の導入や、化石レプリカ作成や隕石の分析操作など、研究現場を見学できるミュージアムラボを新たに設置しました。北大総合博物館は全国の大学博物館の中では飛び抜けて入館者数が多く、また様々な分野で多くのボランティアの方々が活動を続けてきました。しかし以前の博物館では、入館者や学内の教員・学生がくつろげるスペースや、繰り返し訪れたいような施設が少なかったと思います。そこでリニューアルにあたり、完全バリアフリー化に加



学部展示新設ワーキンググループ委員との「北大の学び舎」展示場での打合せ

え、カフェおよび休憩スペースを設け利用者の便をはかっています。またちょっとした講演会やシアターの上映ができるスペース(知の交差点)を作り、学内外の方々に気軽に何度もお越しいただくことを考えています。

今回のリニューアルでは新収蔵庫について実現の目は立ちませんでした。その意味で我々が目指す理想の大学博物館ではないかもしれませんが、その実現のための第一歩であると考えています。今後、さらなる成長を目指す総合博物館に対して、これまで以上のご支援・ご声援をお願いします。

中川光弘
(館長・大学院理学研究院教授/岩石学・火山学)

水産科学館長就任挨拶 ― 水産科学館の歩み



水産講堂の標本室(東北帝国大学農科大学時代)

2016年4月に水産科学館長に就任いたしました。1999年から2008年まで総合博物館の教員として水産科学館に勤務していたため、久しぶりに古巣に帰ってきた感があります。ご挨拶かたがた、今回は水産科学館のこれまでの歩みをご紹介します。

北大水産学部には、1907年に札幌農学校水産学科として設置されて以来、北海道、樺太、ベーリング海などの北方海域や河川に生息する水棲生物、1908年に小樽市で開催された水産共進会、1919年に札幌市で開催された開道50周年記念共進会に出展された水産関係の品々などが収集されてきました。札幌市で教育を行っていた東北帝国大学農科大学水産学科、東北帝国大学附属水産専門部時代には、それらは水産講堂の標本室に展示されていました。また、1935年に函館市に移行し、函館高等水産学校となった際には、校舎正面玄関の二階に標本室、および北洋漁業関係資料を集めた北洋室を設置しました。しかし、1945年の終戦後に校舎は進駐軍の兵舎として接收され、校舎返還後も経済混乱や入学者の増加のために校舎が手狭となり、展示・収蔵スペースが復元されない状態が続いていました。そのような状況下、北海道大学水産学部の創基50周年にあたる1957年に、水産学部同窓会の創基50周年記念事業として標本展示施設の建設、寄付が決定され、1958年7月に水産科学館の前身である水産

博物館が函館キャンパス内に開館されたのです。

水産博物館の名称は博物館法上の博物館に該当しないという理由から、1964年に水産資料館と改められました。1982年の水産学部創基75周年には、水産学部同窓会が母体となった創基75周年記念事業後援会が、水産学部の歩みや歴史的資料を展示するための附属建物を建設、寄付することを決定し、1983年3月に水産資料館別館として開館しました。さらに1988年には、大洋漁業株式会社から1960年に寄贈された旧北洋水産研究館が改装され、水産資料館附属の水産生物標本館として整備されました。



1960年頃の水産科学館本館

1999年4月、北海道大学に総合博物館が設置され、水産資料館は機能的には総合博物館の機構下に入りました。総合博物館との連携をより強固なものにすべく、2003年に水

産学部から総合博物館長に分館化の要望が提出されました。2005年には総長から分館化の許可があり、水産学部創基100周年にあたる2007年の4月に水産資料館は総合博物館に正式に移管されてその分館と位置づけられ、それに伴い名称が現在の水産科学館(英名はFisheries Science Center)に変更されました。

水産生物標本館は築50年以上を経過し、老朽化が顕著になっていました。2011年の耐震検査で「緊急度ランク1」の判定を受け、耐震上極めて危険な状態にありました。さらに、魚類標本だけでも22万点を超えており、建物の標本収容力はすでに限界に達していました。そのような状況下、2016年2月に新たな水産生物標本館が竣工しました。標本が機能的に収蔵できるようになっただけでなく、標本作製スペースも充実し、標本館としての機能が格段に向上しました。現在は標本の配架作業などを行っており、今後の有効利用が期待されます。

残念ながら、1958年に竣工した水産科学館本館は現在では閉館されています。この建物も耐震性が極めて脆弱であり、2015年12月から立ち入りが禁止されており、現在では別館のみが展示施設として公開されています。

したがって、水産科学館の展示公開スペースの充実を図るため、新たな展示施設の建設が急務となっています。日常的な館長業務もさることながら、展示施設の建替えについても微力ながら尽力していく所存です。今後ともよろしくお願い申し上げます。



ヴィクトリア博物館にて専門とするコチ科魚類とともに

今村 央
(水産科学館長・水産科学研究院教授/魚類系統分類学)

新設のミュージアムラボ

2号連続特集

研究紹介(2)

前号に引き続き、総合博物館教員の研究を解説する記事を集めます。資料開発研究系の小林快次准教授(古生物学)と山本順司准教授(地球科学)、江田真毅講師(動物考古学)そして、博物館教育・メディア研究系の湯浅万紀子教授(博物館教育学)と山下俊介助教(映像資料学)の研究をご紹介します。

研究紹介⑦

恐竜の進化と生態復元の研究

小林快次

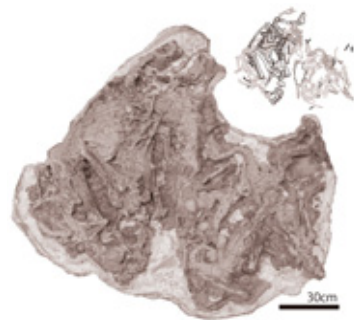
(研究部准教授/古生物学)

私は、1996年に米国の大学院に入学して以来、恐竜の進化と生態復元の研究を行っています。今回は、私の研究内容を簡単に紹介いたします。

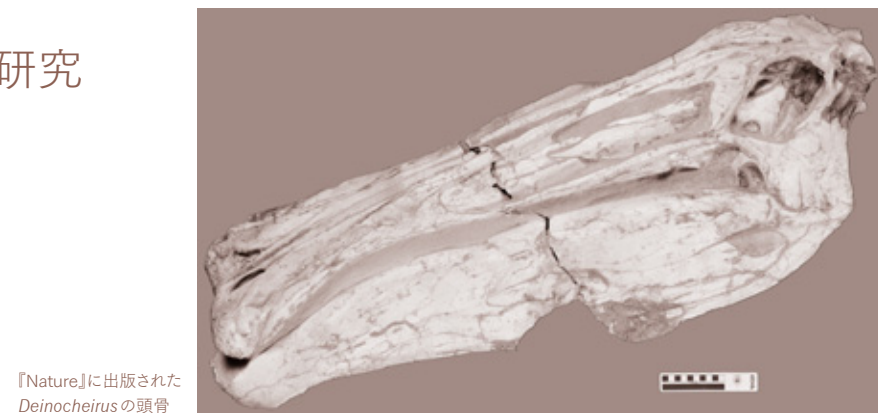
恐竜類は中生代から繁栄している陸棲爬虫類で、白亜紀末に鳥類を除く全てが絶滅しました。恐竜類は体サイズや装飾等において現在では存在しない規格外の進化を達成し、また爬虫類から鳥類への遷移といったマクロエボリューションを保存しています。そのため、脊椎動物の進化メカニズムを理解する上で重要な動物群なのです。

私は主に非鳥類型恐竜類から鳥類への進化過程に着目し、系統解析はもとより「恐竜の鳥化」というテーマで食性や繁殖の進化の研究を行っています。また、国内外のフィールド調査にも力を入れており、特に北環太平洋の地域の調査による白亜紀の北米大陸とアジア大陸の多様性の相違や中緯度と高緯度の多様性の変化などに注目しています。

「恐竜の鳥化」を解明するため、オルニトミモサウルス類とテリジノサウルス類を中心に獣脚類の系統解析と生態復元を行いま



処女論文となった『Nature』に出版されたSinornithomimusの骨格8体。右上は左の写真をトレースしたもの



『Nature』に出版されたDeinocheirusの頭骨

た。オルニトミモサウルス類は収斂進化が多く系統関係の解明は難しいとされてきましたが、2003年に中国内モンゴル自治区から発見したSinornithomimusを新属新種として『Acta Palaeontologica Polonica』に記載し、世界に収蔵されている標本を全て観察することで系統解析を初めて成功させました。この論文は2005年に最も引用された論文としてこの学術誌から賞を受けています。2004年には『Dinosauria』(カリフォルニア大学出版)に日本人で唯一章を執筆し、より解像度の高い系統解析や古生理生態を包括しました。2013年『Nature』に出版した論文では、巨大な前肢を持つモンゴル産Deinocheirusの全貌を解明し、オルニトミモサウルス類には走行性に追究したクレードと巨大化に成功したクレードが存在していたことを発表しました。

1999年の『Nature』では、オルニトミモサウルス類が獣脚類にも関わらず植物食であったことを世界で初めて証明し獣脚類の消化器官や植物食性の進化を議論しました。また、獣脚類の脳の構造にも着目し、2008年にはCTスキャナを用いて嗅球と食性や生態との関連性を明らかにし、獣脚類における食性進化の議論を『Proceedings of the Royal Society of London, Series B』に出版しました。繁殖の進化として翼の進化においては、羽毛の痕跡があるOrnithomimusの化石を2010年の『Science』に発表し、鳥類に継承される恐竜類の翼は飛翔のためではな

く繁殖行動のための装飾に起源があることを示しました。さらに、2013年には中国遼寧省から発見された新属新種のテリジノサウルス類Jianchangosaurusを『PlosOne』に記載し、獣脚類には植物食性の効率化を求めるために、鳥脚類やケラトプシア類の様な顎や歯の構造を収斂進化させた動物群が存在したことを示唆しました。2014年には、テリジノサウルス類の営巣地の発見を報告し、これが世界最大の獣脚類の営巣地であり獣脚類の子育ての進化を理解する上で重要な発見であることも発表しています。

また、2014年には世界最大級の恐竜足跡化石産地を『Geology』に報告し、ハドロサウルス科の極圏域での集団行動を明らかにし越冬していたことを示唆しました。さらに、2012・2013年に北海道むかわ町穂別地区の上部白亜系函淵層から本邦有数の恐竜全身骨格の発掘を指揮しました。この全身骨格は、ハドロサウルス類のものであると同定し、現在も研究を進めています。北大の古生物系では、初代教授の長尾巧先生以来の、恐竜化石大発見となりました。

このように、私は、これまで分類や分岐学が中心だった恐竜類の研究に、古生理生態学といった切り口で非鳥類型恐竜類から鳥類への進化過程の解明を目指しています。また、国内外で多くのフィールド調査を遂行することによって、これまで欧米に比べて遅れ気味だった日本の恐竜類研究を促進させるよう、現在も調査・研究を行っています。

研究紹介⑧

宇宙を診る装置

山本順司

(研究部准教授/地球科学)

馬上謙一

(理学研究院助教/宇宙化学)

私たちは地球の岩石や隕石の化学分析を通して、太陽系の成り立ちに思いをめぐらせています。地球は隕石の集積によって生まれたと考えられています。ですから地球の岩石や隕石には太陽系で起こった様々な事件が記録されているかもしれません。ではどうすればそのような情報を抽出できるでしょうか。

2016年3月、ある分析装置が当館1階N105室へ導入されました(写真1)。これは「希ガス用質量分析装置」と呼ばれるものです。希ガスは化学反応をほとんど起こさない元素群で、不活性ガスとも呼ばれます。この特徴は隕石や地球の成り立ちをさぐる上で大変有用な利点となります。なぜなら、多様な歴史をたどってきた隕石や地球は、溶けたり鉱物を作ったりする過程で様々な化学反応を起こし、元々の化学的特徴を失っているかもしれません。その点希ガスは化学反応をほとんど起こさないため、隕石や地球が形成した当時の特徴を残している可能性が高いのです。

この度移設した希ガス用質量分析装置は、元々大阪大学で活躍していた2台のうちの一機です。大阪大学に導入された時の価格は1台あたり1億円近くであったと思われます。その後、さらに改良が加えられ、非常に特殊で高価な装置へと変貌を遂げていきました。しかし、担当教員の退職とともに2台とも放出されることになり、門下の方が在籍していた筑波大学へと引き取られ、縁あって1台を当館におわけいただけることになったというものです。

ただ、装置譲渡の連絡を受けた時はかなり逡巡しました。なぜなら大阪大学から搬出される際、装置はばらばらに分解されており、さらに筑波大学までの搬送の間に破損した部品も多く、果たして受け入れたところで往時の性能を取り戻すことができるのか懸念を抱いたためです。このような心境のまま当装置の受け入れを決断したわけですが、筑波大学から当館への搬送も困難を極めました。誌面の制約があるため詳しくは記せませんが、梱包から搬出、搬送、搬入、どの過程においても大小様々なトラブルがあり、さらに搬入時期と耐震改修工事期間が重なったため、当館への搬入後も半年以上をガバナールームで眠らせることになりました。そして耐震改修工事が終わった本年3月、ようやく本来のスペースに設置できることになりました(写真2)。

覚悟していたことですが、装置は酷い状況で、破損部品の修復および交換作業を続け、装置に電源を投入できたのは設置から一ヶ月後。破損部品はまだ多く、試料の分析

がおこなえるようになるまでにはまだハードルがたくさんありそうです。

装置を設置したN105室は作業風景をご覧いただける動態展示室となっています。無事稼働させられる日を目指して日夜修理作業に動んでいますので、作業の様子を見守っていただきたいと思います。

以下に、この装置で実施する予定の研究を紹介します。

[太陽系形成初期の太陽照射量推定]

太陽系が形成されつつあるまさにその時に存在していた隕石が見つかっています。そのような隕石には当時の太陽から撃ち込まれた希ガスがたっぷり含まれていますので、それらを調べると太陽系形成初期の姿が見えてくるかもしれません。

[地球内部に潜む隕石成分の検出]

地球は隕石の集積によって生まれたので、地球深部には隕石的成分が今も潜んでいるかもしれません。地球深部から湧き出す溶岩に含まれる希ガスを調べれば、この地球がどのような種類の隕石によって生み出されてきたのかわかるでしょう。

[溶岩の年代測定]

北海道には多くの火山が存在しますが、噴火した年代が良くわかっていないものも少なくありません。札幌にもそのような溶岩流が存在します。この装置を用いて様々な火山の活動年代を暴くことで、私たちの土地の成り立ちを探っていきます。



写真1 「希ガス用質量分析装置」の搬入

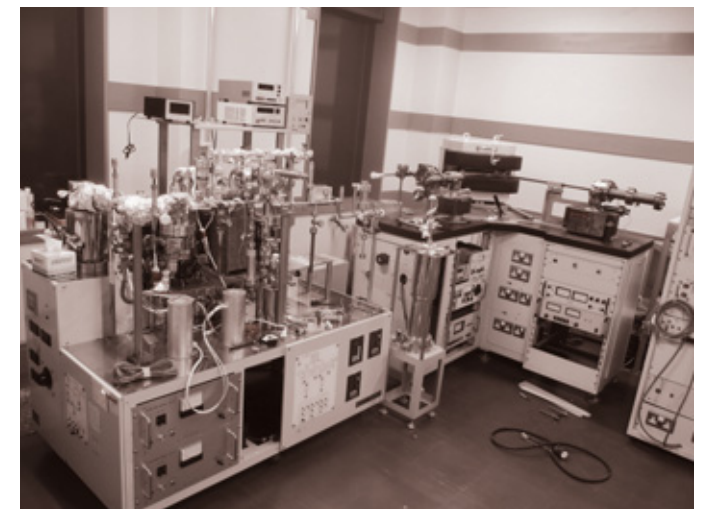


写真2 稼働に向けて修理作業が進められている

研究紹介⑨

遺跡から出土した骨の分析から、 ヒトとニワトリの歴史の起源を考える

江田真毅

(研究部講師 / 動物考古学)



図1 那覇市立博物館で展示されている「世界最古のニワトリの骨」(Eda et al 2016 JAS67:25-31より)

一週間の食事を振り返って、その肉や卵を食べなかった方はどのぐらいいるでしょうか。現在、世界中で日々の食卓にのぼるニワトリ。ある意味、私たち人類にとってもっとも身近な生物の一つと言えるでしょう。近年、私はヒトとニワトリの歴史の起源の解明をメインテーマの一つとしています。

ニワトリの祖先は東南アジアの森林に生息するセキショクヤケイです。2014年11月まで、「世界最古のニワトリの骨」は、中国・河北省の磁山遺跡(約7,400年前)から出土したものでした。また、中国北部では、他の先史遺跡からも多数のニワトリの骨が報告されてきました。このため、中国北部はニワトリの家禽化の中心地と考えられてきました。

しかし、中国北部には現在セキショクヤケイはいません。その分布域から遠く離れた地域で飼育が始まるものでしょうか。また、実際に「ニワトリの骨」の報告にあたり、骨をニワトリと同定した根拠はほとんど示されていないことがわかりました。このような経緯から、私たちは中国北部の先史遺跡から出土した鳥の骨の調査を開始しました。

最初に調査したのは、磁山遺跡の「世界最古のニワトリの骨」でした。この資料を調査した2011年8月、私は一目見て展示されていた「世界最古のニワトリの骨」(図1)のほとんどが、ニワトリの骨ではないことを確信しました。

残念ながら、今日まで私は中国に生息する55種のキジ科の骨から「ニワトリの骨」を見分ける決定的な形態的特徴を見つけ出せていません。しかし、キジ科の骨の中から「ニワトリではない骨」を見つけることは比較的容易です。たとえばキジやヤマドリなどの足根中足骨(ヒトでは足の裏にある骨)には内側足底稜という稜がありますが、ニワトリやセキショクヤケイではこの稜がありません(図2)。ところが「世界最古のニワトリ」の足根中足骨では、すべてこの稜がみつかったのです。

その後の調査でも、中国北部の新石器時代や青銅期時代の遺跡から出土したキジ科の骨のほとんどは「ニワトリではない骨」であり、「ニワトリの可能性のある骨」は非常に稀なことがわかりました。このことから、ニ

ワトリの飼育は青銅器時代においても一般的ではなかったことが考えられました。

結果の論文投稿を準備していた2014年12月、思わぬ論文が発表されました。中国とオランダの研究グループが、中国北部では約10,000年前からニワトリが飼育されていたとする論文を著名な国際誌『Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America』に発表しました。この研究グループの論文では、磁山遺跡のほか、中国北部の約10,000年前の遺跡などから出土したキジ科の骨のDNAが解析されていました。そして驚くべきことに、分析に成功したすべての骨がニワトリの骨だったということです。

論文を一読して、さらに驚くべきことを発見しました。なんと、その論文で「典型的なニワトリの骨」として示されていた写真にはイヌの仲間の骨が含まれていたのです。この研究グループはもちろん、論文を審査した査読者や編集者も、骨を見て鳥かどうか見分けられなかったようです。著名な国際誌であっても論文の審査体制に不備があることを実感しました。

先行研究への批判と私たちの研究成果を盛り込んだ論文は、2016年3月に出版されました。しかし、研究は端緒にすぎません。私たちは中国北部の先史遺跡で「ニワトリの可能性のある骨」が非常に稀なことを明らかにしましたが、DNA解析などの方法でそれらの骨がニワトリのものかを調べる必要があります。またニワトリの飼育が最初に始まったのは、セキショクヤケイが分布している東南アジアや中国南部であったはずで、今後、これらの地域の遺跡を重点的に調査し、ヒトとニワトリの歴史の起源を明らかにしたいと考えています。

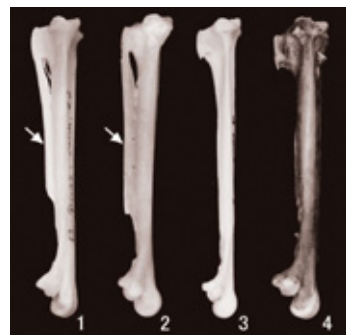


図2 キジ(1)、ヤマドリ(2)、セキショクヤケイ(3)、ニワトリ(4)の足根中足骨。キジとヤマドリでは内側足底稜(矢印)がある(江田・井上 2011 動物考古学28:23-33より)。

研究紹介⑩

博物館体験の記憶の研究

湯浅万紀子

(研究部教授 / 博物館教育学)

私は博物館そのものを研究対象とし、博物館と社会の関わりについて調査研究しています。社会に当然のように存在している博物館ですが、近年は、その設置主体が博物館の運営を見直して、博物館の存続を検討する局面が生じています。存続の危機や閉館を報じるニュースや新聞記事を記憶されている方もいるかもしれません。博物館の存在意義とは何でしょうか。博物館の運営を検討する際に必ず指標とされるのが入館者数です。他にも、展示やセミナーなど企画の開催回数や参加人数も無視できない重要な指標ではありますが、これだけでは博物館の存在意義を検討するのに十分ではないでしょう。「博物館が」実施したことについてだけでなく、「来館者が」博物館で何をしたのかに注目する検討が不可欠です。

多くの博物館で質問紙調査を実施し、来館者のプロフィールや、展示や企画に対する満足度を問い、回答結果を分析しています。調査は多くの場合、展示を観覧したり企画に参加した直後に実施されます。しかし、展示や企画について満足したか理解したか否かを直後に確認しても、それが数日後、数ヶ月後、あるいは数年後に保持されているかは分かりません。また、博物館で人々が得ることは、何かを理解したという認知面での学習に限定されるものではありません。

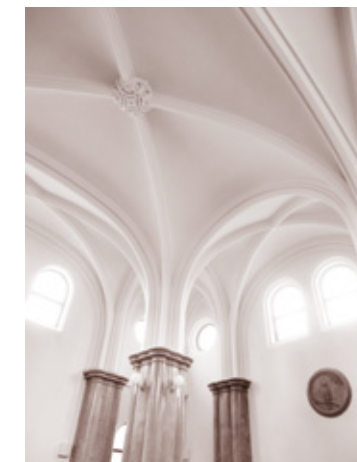
私は、博物館の存在意義を探る重要な指標の一つとして、人々の「博物館体験」の「長期記憶」に注目し、「記憶のなかの博物館」という研究テーマのもとで調査研究を展開しています。この研究に取り組む経緯の一つは前述した博物館評価にまつわる問題関心によるものですが、私自身の体験が発端になっています。1964年に創設された日本の理工系博物館の草分けである科学技術館に久しぶりに訪れた際、同館サイエンス友の会会員である小学生達が研究テーマを自身で定めて実験に取り組んでいる様子を見近に見て、実験内容のレベルの高さ、そして彼らの真剣な眼差しに驚きました。彼らが



博物館体験は、来館後に時を経て思い出す時も含めてトータルにとらえられる

ここでの体験を経てどのような大人になっていくのか、その未来を見てみたい。未来にタイムスリップすることはできないため、過去に戻って、博物館でさまざまな体験をした人々がその記憶を保持していくのか、変容させていくのか、また、その記憶とともにどのように博物館と関わっていくのかを調査したい。彼らに聞き取り調査を実施し、個人的背景や社会背景などとともに彼らの語りを分析することで、博物館が人々にもたらした意味を明らかにし、博物館の今後の活動指針を導きたいと考えたのです。

大学院時代からいくつもの博物館や教育機関にご協力いただき、調査研究を進めてきました。前述した科学技術館の他に、同じく50年以上の歴史をもつ名古屋市科学館



博物館の空間も博物館体験の重要な要素として記憶される場合が多い

と明石市立天文科学館、大学院生として研究と活動を展開する機会をいただいた東京大学総合研究博物館、地域回想法に先進的に取り組んでいる昭和日常博物館、実験演習と科学館訪問を重ねる生徒たちが関連書籍を出版した奈良学園、北大総合博物館などです。

2009年度からは認知心理学者の清水寛之教授(神戸学院大学)と学際的共同研究を進め、記憶特性質問紙を用いた質問紙調査を面接調査に先行して実施し、データの量的分析と質的分析を進めています。また、科学教育と博物館教育学分野の研究をリードするDavid Anderson教授(British Columbia大学)とも研究を進め、博物館体験の記憶の特質を探求しています。

私の研究では、来館者に限らず、博物館に関与するさまざまな人々、たとえば博物館スタッフやボランティア、設置主体、近隣の店舗の関係者や住民などを調査対象としています。調査協力者の記憶は、展示を見た、何かを学んだということにとどまらず、同伴者やスタッフとの対話、学芸員への憧れ、身についた自信、館内のショップで購入したグッズ、博物館の建物空間など多様であり、それに対して意味づけを行っています。

2016年7月26日にリニューアルする北大総合博物館が、多くの方に記憶され意味付けられ、そして未来に向けてその記憶が紡がれていくように、私自身の研究成果を活動に活かしていきたいと思っています。

研究紹介①

学術映像の再資源化

山下俊介

(研究部助教/映像資料学)

総合博物館では日夜、学術標本や資料にもとづく研究や教育が行われています。私の場合は、研究に関わる記録やアーカイブ資料の「再資源化」に注目しています。研究現場で生み出された記録資料は、標本や文化財資料のように自明な学術的価値があると捉えられていません。ある活動の証拠、あるいは歴史的な価値以外に学術資料としてどのような可能性をもつのでしょうか。情報付与、記録化などの具体的方法を検討しながら、こうした記録資料の再資源化を目指すことが私の研究関心です。今回は、映像資料に関するアーカイブの実践研究について紹介します。

2009年、学術活動の中で生み出された映像を「学術映像」と規定して、国際映像コンペティション、映像展覧会を同世代の研究者と共同企画しました。この企画の中で膨大かつ多種多様な学術映像の広がりを目の当たりにすることができました。とにかくたくさん集めて見比べないと個々の特徴や共通項が見えてこないのは、初期の博物館や分類学における収集活動のそれと変



制作ディレクターへの素材映像の聞き取り



中川研究林での伐倒作業の撮影



北海道大学総合博物館蔵の学術映像資料

わりないかもしれません。次に、既存の学問分野の枠組みを越えて映像群を検討するために、研究者の映像実践(研究者の映像への関わり)に着目し、その3つの類型(のこす・よみとる・あらわす)に沿って「学術映像」を検討することを提案しました。上映展示ではこの3類型のシンボルを幕間に上映しながら視聴者への「研究者の映像実践」の意識付けを行いました。期待していたような視聴結果にはなりません。映像視聴には無数の内容・意味の層が織り込まれており、私たち視聴者はそのうちの幾つかしか即時的に把握できないと考えられます。例えば、内容(物語・ストーリー)の層、動きを捉える生理学的な反応の層、視聴環境の層などがあり、この場合はさらに「研究者の映像実践」層の読み取りを求められたことになります。逆に言えば、ストーリーを組み込まれていない(編集されていない)素材映像を視聴する方が、他の層を認識できる余地がある、ということが示唆されます。こうした経験を踏まえ、次の上映展示の機会には、ある地域に関する、再現ドキュメンタリー映像、古い観光映像に加えて、考古学者が撮影した記録映像を上映し、質問紙調査を行ったところ、特に記録映像に対して視聴者の能動的な映像内容の読み取りが行われ、関心も高かったことがうかがわれました。異なる性質の映像を比較視聴することで、記録映像への能動的読み取り傾向が強まるのであれば、退屈だと敬遠される記録映像や素材映像の上映活用(再資

源化)の一つの方策になるかもしれません。

映像資料にどのような情報を付与すれば活用されるのでしょうか。人類学・霊長類学の放送番組素材のアーカイブ化を数年前に行った際には、素材映像を視聴しながら制作ディレクターに聞き取りを行い、そのやりとりを映像に記録するという方法をとりました。聞き取りを通して、番組を監修した研究者と制作者との関係をはじめ、制作体制、番組企画の背景などが編集前の各素材映像にも大きな影響を与えていることが明らかになりました。こうした情報は、素材映像が研究に用いられる際に必須の情報となります。コンテキスト情報をできるかぎり映像等で記録し、対象資料とともに残す方法は、他の博物館資料にも積極的に援用していきたいと考えています。

今年の2、3月、中川研究林の伐倒作業を記録するため撮影を行いました。本学研究林の第一級の技術者集団が段取りよく、鮮やかに伐倒・集材・土場等の作業を進めていく様子を映像に収めることができ、大変貴重な記録となりました。このように、映像を新しく撮影する場合にも、再資源化にむけた関心を持って取り組んでいます。編集しひとまとまりになった映像作品と、素材映像をどのように関連付けて残すかという問題です。古い映像をアーカイブするだけでなく、映像メディアを用いる研究者自身による映像の残し方を検討することが、学術映像アーカイブ構築の肝になると考えているからです。

2015年度

北大総合博物館年次報告会

●2016年4月11日

2015年度の北大総合博物館の活動報告会が2016年4月11日の午後に、新たに整備された1階多目的スペースで開催されました。中川光弘館長より開会の挨拶をいただいた後、ミュージアムマイスターとして理学院の太田晶さん、理学部の日下葵さんの2名に認定証が授与されました。また博物館ボランティアとして、2015年度は本館では5年表彰が19名、10年表彰が5名、函館キャンパスにある分館の水産科学館では5年表彰が2名、それぞれ館長より感謝状が手渡されました。



総合博物館にて中川館長とミュージアムマイスター認定者・ボランティア表彰者



水産科学館にて今村館長とボランティア表彰者

次に、研究部報告として2015年度の活動が報告されました。2015年度は大きな動きがあった年度でした。2015年4月に理学研究院の中川教授が新館長に就任し、6月には耐震改修工事中だった第2農場が一般公開を再開し、7月には博物館の第2期耐震改修工事が開始されました。これに伴い博物館教員たちの引越しがあり、9月からは函館キャンパスの水産生物標本館の建て替え工事が開始され、2016年2月には同標本館が完成しました。同じく2016年2月末には博物館の耐震改修工事も終了し、3月には工事に備え移設していた標本類の戻し作業が行われました。



年次報告会の様子

続いて2016年7月26日にリニューアルオープン控える博物館の展示予定についても、その概要が報告されました。

さらに資料部の菊田融、持田誠、小林孝人、下村政嗣各研究員から2015年度の研究活動報告と化石グループからボランティア活動報告がなされました。

最後に中川館長から閉会挨拶をいただき、全体として2時間程度の報告会を無事終了し

ました。毎年、その一年間を振り返り、活動を報告するという本報告会も、総合博物館の定例行事として定着してきたように思います。本報告会を開くにあたっての関係者のご理解・ご協力に感謝申し上げます。

高橋英樹

(研究部教授/植物体系学)

博物館研究会の開催

●2015年10月15日、12月11日

総合博物館では、2015年秋から博物館研究会を開始しました。博物館に関わる研究者・実践者による講演とディスカッションを通じて、博物館関連分野の研究や実践活動の情報を共有し、博物館研究を進展させ、博物館発の学際研究を生み出すことを目的としています。

10月15日にはLawrence Liao氏(広島大学生物圏科学研究科)“Re-examining the dual roles of research and education among natural history museums in the Philippines”を開催しました。フィリピンの自然史博物館の研究・教育活動の現状ととともに示され、日本の博物館の状況と比較しながら研究会参加者との議論が行われました。12月11日には松本隆史氏(九州大学総合研究博物館)「新しいメディアを博物館で活用する体制の研究」を開催しました。法制度やガイドラインが未整備の状態、ドローン等の新しいメディア技術を大学博物館がいかに学術研究に利用しうるか、参加者との議論が活発に行われました。2016年度も、引きつづき博物館研究会を開催します。ご関心のある方は研究会世話人までお声かけください。

山下俊介

(研究部助教/映像資料学)

日本古生物学会学術賞を
小林准教授が受賞

総合博物館の小林快次准教授が、平成28年2月、「恐竜類の古生物学的研究」というタイトルで日本古生物学会から学術賞を受賞しました。これまで恐竜研究でこの賞をもらった人はいなかったため、恐竜というテーマでは初の受賞となります。また、北大在職者としては、昭和44年の加藤誠教授(古生代サンゴ)、昭和53年に棚井敏雅教授(古植物)以来の受賞で、38年ぶり3人目の受賞となりました。受賞後に北大に在籍した先生では、昭和55年の初代総合博物館館長の小泉格教授(当時大阪大学:珪藻)や昭和62年の元副学長の岡田尚武教授(当時山形大学:石灰質ナノプランクトン)らがいらっしゃいます。小林准教授の研究内容については、本誌特集の「研究紹介」に詳しく解説しています。

あまり知られていませんが、北海道大学から本邦の恐竜研究がスタートしました。長尾巧教授が昭和9年にニッポソウルスを発掘し、これが日本の恐竜研究の先駆けとなったのです。小林准教授は、「この北大の伝統を受け継ぐべく、恐竜研究に励んでいきたい」と述べています。

タイ王国科学技術博覧会2015での企画展示

●2015年11月14日～25日



企画展示のオープニングセレモニー（左から、中川館長、Sonchaeng教授、Chanapaithoon副館長・館長代理）

タイ王国科学技術博覧会は毎年、タイ王国にて開催される科学技術の祭典で、タイ王国国立科学博物館(NSM)が主催しています。本博覧会はタイ王室やNSMなどのタイ国内の機関だけではなく、日本、米国、英国など各国の関係機関が参加しています。2015年の博覧会はバンコク近郊ノンタブリ県のIMPACT展示会議場にて、11月14日から25日の日程で開催されました。開催期間中の訪問者は100万人を超えました。

総合博物館(HoUM)はタイ王国科学技術博覧会2015に2013年と2014年に続き、3回目となる企画展示「The marine animals and under water photos of Hokkaido island and

Thai waters (北海道とタイの海産生物と水中写真)」を、NSMとタイ王国プラパ大学と共に出展しました。本企画展示は大きく北海道ブースとタイブースに分かれました。北海道ブースではマダラ、ケムシカジカ、ババガレイ、エゾパフンウニなどの北海道を代表する魚介類の標本展示と、流氷下の潜水によって撮影された写真や映像を展示しました。タイブースではタイ周辺に生息する魚類や甲殻類などの標本展示と、熱帯の海中で撮影されたマンタの写真や映像を展示しました。本企画展示の中で、特に目を引いたのが、当館からNSMへ寄贈したタラバガニの剥製です。このタラバガニは5.8kgもの大きさで、訪れた小さな子供達の中に

はその迫力のあまり、泣く子もいました。

本企画展示のオープニングセレモニーは11月15日の朝から開催され、中川光弘館長(HoUM)とSakorn Chanapaithoon副館長・館長代理(NSM)の挨拶の後に、テープカットが行われました。オープニングセレモニーの後には、関連講演会が開催されました。講演会には中川館長の総合博物館紹介に始まり、水産科学館の矢部衛館長(当時)による知床の浅海魚類調査に関する講演、プラパ大学のPichai Sonchaeng教授によるタイの海洋生物の多様性に関する講演、株式会社鉄組潜水工業所の谷敬志氏による北海道周辺の潜水調査に関する講演が行われ、100名ほどが講演に耳を傾けていました。午後からは博覧会のグランドオープニングセレモニーが行われ、タイ王国科学技術省や各国の大使館などから多くの関係者が参加しました。当館からも中川館長、矢部館長、河合俊郎助教が参加し、Pichet Durongkaverrojタイ王国科学技術大臣から中川館長へ感謝の印としてトロフィーが授与されました。セレモニー後にはDurongkaverroj科技相や佐渡島志郎在タイ王国日本国大使が当館の企画展示ブースを訪れました。

本博覧会での企画展示は総合博物館、NSM、プラパ大学、株式会社鉄組潜水工業所、有限会社アイアン、おたる水族館、函館市役所の多くの方々のご協力により、大成功に終わりました。末筆ながら皆様に御礼申し上げます。

河合俊郎

(研究部助教/魚類系統分類学)



Durongkaverroj 科学技術大臣からトロフィーを授与される中川館長



企画展示を案内する様子

2016年度企画展示

「ランの王国」プレ小展示Ⅱ

●2016年3月10日～24日



植物画の並ぶギャラリー

本年2016年の8月5日から9月25日までの予定で開催される企画展示「ランの王国」のプレ小展示Ⅱとして、3月10日から24日までの間、北海道大学構内のファカルティハウス「エンレイソウ」の1階ギャラリーで、ランの植物画展を開催しました。

今回の展示では、本番の企画展示のプレ小展示第2弾として、札幌市在住の植物画家で当博物館のボランティアでもある船迫吉江さんによる北海道産ラン科植物の植物画22枚23種類を展示しました。本番の企画展示への期待を高めていただけたことと思います。

総合博物館の耐震改修工事により展示室が使えない中で、窮余の策として本会場を使用することとなりましたが、開催期間中の土・日・祝日はギャラリーが閉館となるため、平日しかプレ小展示をご覧いただけないことが残念でした。

開催期間全日で監視員を配置することが難しかったため、来場者数データはとれなかったのですが、81名のアンケート調査結果を得ることができました。来場者の64%が女性で、市

内在住者が58%、札幌市以外の道内外在住者が36%でした。年齢層からは60代・70代が全体の67%を占めました。やはり熟年層の女性が植物画に興味を持たれる傾向があるようです。どのようにしてこの展示会を知ったのかについては、友人・知人が41%、通りがかりが32%で、本プレ小展示では広報活動にあまり経費をかけられなかった結果と思われます。また来場理由としては「植物が好き」という方が61%で、根強い植物ファンの存在を確認することができました。

ラン科(800属23,000種近く)は、キク科(1,600属24,000種近く)、マメ科(720属20,000種近く)と共に、被子植物の3大科の一つとされる、大変大きな植物科です。昆虫と花との共進化、菌根菌とのパートナーシップといった、ユニークな適応進化を遂げて成功した植物群です。特にその魅力的な花は形、色、香りにおいて極めて多様で、園芸植物として多くの人々に愛され、多数の品種が選抜、多くの交配種、交配属が作出されてきました。

総合博物館リニューアルオープン後の最初

の企画展示として、8月5日から9月25日までの予定で開催される企画展示「ランの王国」では、オーストラリアや中国を含むランの多様性と驚異の適応戦略を紹介する予定です。

高橋英樹

(研究部教授/植物体系学)



プレ小展示Ⅱ「ランの王国」のポスター

卒論ポスター発表会

●2016年2月27日・28日



来場者に説明する4年生

北海道大学の学部4年生が卒業研究を1枚のポスターにまとめ、市民や他分野の学生、教職員にわかりやすく発表し、質問に受け答えする「卒論ポスター発表会」を開催(2016年2月27日・28日)しました。この取り組みは、北大の全人教育の一環として展開しているミュージアムマイスター認定コースの社会体験型科目に位置づけており、コミュニケーション能力の涵養や異分野への関心の喚起、大学博物館への理解を深めることを目指しています。8回目を迎えた今年度は、耐震改修工事中の博物館から場所を移し、大学正門のすぐ左手にある北大インフォメーションセンター「エルムの森」で開催しました。

発表には下記のように工学部から4名、農学部から4名、理学部から1名、文学部から1名の計10名が参加しました。1枚のポスターを完成させるまでに、当館の担当教職員の指

導や他の発表者、運営担当学生とのディスカッションを行う中間発表会に参加し、そこで得た意見を取り入れつつ、改訂を繰り返しました。さらにさまざまな来場者を想定し、それぞれに応じた説明のリハーサルを重ねて準備しました。発表会当日は、緊張しながらも来場者とのコミュニケーションを楽しみながら説明していました。

和久井彬実(農学部)「高山植物が低地に生える?—風穴地の環境が植生に与える影響—」

後藤裕也(工学部)「函館市による伝統的建造物群保存地区制度に対する取り組み」

日下葵(理学部)「オフィオライトからわかる地球の過去と未来—顕微鏡編—」

池田敬登(農学部)「uORFを介したストレス応答に対する新しい知見—植物はどのようにして迅速なストレス応答を行うのか?—」

柳原千絵子(工学部)「北海道大学植物園パチャラー記念館の現状」

玉置都華(農学部)「勾配がなくても水が流れる!?—無勾配暗渠の排水特性と機能評価」

町田義敦(文学部)「ピーテル・ブリューゲル(父)の風景表現に関する一考察—《ナポリの港の景観》から見るブリューゲルの独自性と革新性—」

河合玲奈(工学部)「札幌の歴史地図に表現された都市空間」

田村紗彩(農学部)「北海道が重点保全する植物エンピセンノウを守るための生態調査と遺伝解析」

青葉桜(工学部)「トリノ工科大学建築学部の1970年代以降の建築教育の特徴」

発表会の運営もこれまで通り、学生が担いました。今年度は教育学部と文学部から1名ずつが参加しました。広報ポスターやプログラムの制作を担当したほか、中間発表会にも出

席して来場者の視点からポスターの疑問点や不明点、発表の改善点にいたるまで積極的に発言しました。発表会当日には司会や受付を担当し、スムーズに会が進行するよう発表者をサポートしました。

発表会の最後には、2日間の来場者の投票による「来場者賞」、市民4名と本学教職員6名から成る審査員の評価による「最優秀賞」「優秀コミュニケーション賞」「優秀デザイン賞」が決定しました。「最優秀賞」は農学部の田村紗彩さんが、「来場者賞」は農学部の玉置都華さんが、「優秀コミュニケーション賞」は工学部の青葉桜さんが、「優秀デザイン賞」は農学部の和久井彬実さんと理学部の日下葵さんが受賞し、表彰式と講評会を行いました。

来場者には、さまざまな学部の4年生の研究成果を知っていただく機会となりました。発表者と運営担当学生の事後考察レポートには、コミュニケーション能力を身に付ける機会になっただけでなく、卒業研究を見直したり、他分野の学生の研究を知ったり、来場者から新鮮で有意義なご意見をいただいたり、発表会を運営していく楽しさと難しさを実感したなど貴重な経験を積んだことが綴られています。準備のプロセスや当日の様子、参加した学生の事後考察レポートは当館ホームページで公開しています。

<http://www.museum.hokudai.ac.jp/highereducation/storytopic/83/>

湯浅万紀子

(研究部教授/博物館教育学)

土曜市民セミナーの運営を担当して

2015年度の土曜市民セミナーは、本誌32号でご紹介したように、「大学博物館 研究最前線」というテーマで北大総合博物館の教員が最新の研究内容について講演し、学生が運営を担当しました。担当学生として、この取り組みを振り返りたいと思います。

私は、博物館に関心があり、また人前に出て話す積極性を培いたいと思い、運営に参加しました。講師との打合せ、ポスター制作、そして司会進行など、初めてのことであり、貴重な経験になりました。先生方の最新の研究について講演を伺い、さらに運営を担当することで、博物館により親しみを感じ、興味が深まりました。運営を指導する先生からは、講師とのメールの

左 セミナーの司会進行を担当／
右 制作したポスターを手に、講師やボランティア、学生の来場者とともに



やりとりや司会進行など運営全般にアドバイスしていただきました。ポスター制作では、講師のご意見を伺いながらレイアウトや色使いを工夫しましたが、イメージを的確に反映させることは予想以上に難しかったです。司会進行では、原稿を見ながらも視線や話すスピード、話の区切りを意識して臨みました。セミナー運営はやりがいがあり、やや行き詰ることもありましたが、とても楽しくやり遂げることができました。

特に印象に残っているのは、多くの方と出会えたことです。総合博物館のボランティア

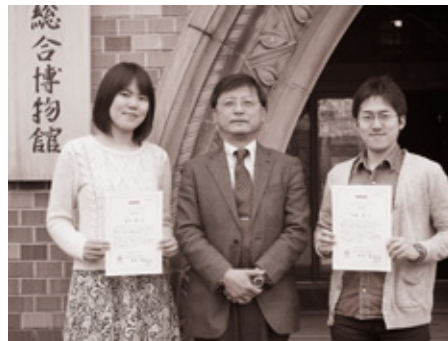
や他大学の学生も来場され、さまざまな方に話しかけていただき、貴重なお話を伺う機会もあり、この機会にしか得られない体験ができました。セミナー運営を通して本当に充実した経験ができたことが、私にとっての博物館の思い出になったと感じます。ここで得た経験を今後の活動にも活かしていきたいです。(セミナーの題目は巻末の記録をご覧ください。)

時永万音

(理学部地球惑星科学科2年)

ミュージアムマイスター認定式

●2016年4月11日



博物館正面で記念撮影(左から日下さん、中川館長、太田さん)

総合博物館では、本学が目指す全人教育の一端を担う教育プログラム「ミュージアムマイスター認定コース」を2009年度より展開しています。これまでに27名の学生がミュージアムマイスターに認定されています。

2015年度後期に認定されたのは3名で、4月11日に太田晶さん(理学院修士課程1年次認定)と日下葵さん(理学部4年次認定)の認定式が行われました。当日は、当館の年次報告会も兼ねていたため、教職員や資料部研究員、ボランティアなど多くの方々が集まるなか、中川光弘館長から認定証が授与されました。

太田さんは、来館者に展示解説などを行う北大ミュージアムクラブMouseionに所属し、その活動がきっかけでミュージアムマイスターを目指すようになり、現在は恐竜化石の発掘関連で当館と相互協力協定を結んだむかわ町穂別で、地域おこし協力隊の一員として活動しています。日下さんは、当コース社会体験型科目の博物館コミュニケーション関連授業の1つ「学生発案型プロジェクト」に興味を持ち、博物館の標本をモチーフにしたキャラクター作りに奮闘しました。今年2月末に開催された卒論ポスター発表会にも参加し、優秀ポスターデザイン賞を獲得しました。当コースで得た経験を活かし、今後二人の活躍の場が広がっていくことが期待されます。

本プログラムへの登録は随時行っています。ミュージアムマイスター認定コース、関連プロジェクトの詳細や活動報告は総合博物館Webサイトでもご紹介しています。

西本結美

(研究支援推進員)

博物館コミュニケーション特論 映像制作とスノーボード

●2014年2月8日～2月10日

総合博物館では、北海道大学大学院の授業科目として「博物館コミュニケーション特論 映像制作とスノーボード」(担当:藤田良治/高等教育推進機構、湯浅万紀子/総合博物館)を毎年度開講しています。この授業は、厳冬期の3日間に集中講義形式で行われ、雪上での移動方法や低温環境下での映像撮影について学びます。今年度の受講生5名のうち、4名が留学生でした。受講の動機は、授業のタイトルに興味を持った、雪の上での撮影を学びたかったなど様々でした。

授業ではまず、雪上での移動方法としてスノーボードの滑走技術を身に付けます。その後、スノーシューでの移動を学び、雪崩などに巻き込まれた際の救助に使用するビーコンと呼ばれる装置の使い方も学びました。受講生は、各自が用意したデジカメやビデオカメラ、スマートフォンのカメラ機能でこれら一連の様子を撮影しました。低温下では、カメラバッテリーの消耗が著しく早くなったり、液晶画面の表示も鈍くなって被写体の確認が困難になることがあります。これらの状況を避けるためには、撮影直前まで機材を温めておく必要があ



附属図書館で映像編集を行う受講生

ります。受講生は、雪上移動を学びながら低温下での撮影機材の扱い方も実践的に学びました。最終日には、プロも使用しているAdobe Premiereという映像編集ソフトを使用して附属図書館で編集を行い、各自の映像作品を発表しました。

大学院生は道外から入学する比率が高く、北海道のパウダースノーを知らない学生も多くいます。この授業は映像制作のスキルを学ぶだけでなく、北海道の質の良い雪を活用し、北海道大学らしく、学生の思い出に残る授業になると、受講生から好評を得ています。

藤田良治

(高等教育推進機構オープンエデュケーションセンター准教授/博物館映像学)

特任教員紹介

フィリップ・カーリー



カナダでのカーリー博士と恐竜発掘

平成27年10月から平成28年3月まで、アルバータ大学生物科学部のフィリップ・カーリー(Philip Currie)教授を特任教員として招待しました。カーリー博士の専門分野は恐竜研究で、特にカナダやモンゴルから発見されている

白亜紀末の恐竜に関する研究に従事しています。カーリー博士は、私と1997年以降共同研究を行っており、また私が米国で博士号を取得する際の審査員の一人でした。同氏が特任教員として勤務している間、「北海道を含む東アジアから産出する白亜紀末の恐竜に関する共同研究」を実施しました。これは、むかわ町穂別の恐竜化石をはじめ、その他の北海道から発見されている化石を中心に、東アジアの恐竜と比較するというものです。総合博物館公開シンポジウム「絶滅動物化石の最新研究in 2016」(2016年3月5日)では、カナダの恐竜研究の最新情報を発表していただきました。短い時間でしたが、北大の学生や院生とも深い交流ができ、また今回の滞在がきっかけとなりいくつかの研究プロジェクトが開始しました。今後も関係を深めていき、恐竜研究の発展を目指します。

小林快次

(研究部准教授/古生物学)

公開シンポジウム

「絶滅動物化石の最新研究 in 2016」開催

●2016年3月5日

2016年3月5日に北海道大学総合博物館公開シンポジウム「絶滅動物化石の最新研究 in 2016」が開催されました。北海道大学では古生物学の研究が盛んに行われています。その最新研究を紹介するため、シンポジウム「絶滅動物化石の最新研究」は2012年にスタートしました。2年に1度行われるこのシンポジウムも今年で3回目を迎え、北大総合博物館の恒例行事となりつつあります。研究室のメンバーもまた、このシンポジウムの時期が近付くと「ああ、そろそろアレの季節だなあ」と感じるようになってきました。

このシンポジウムでは、小林快次准教授をはじめ北大古生物学研究室のメンバーはもちろんのこと、海外に留学している先輩や卒業生も参加し、海外の第一線の研究者もお招き

して、それぞれの古生物学分野での最前線の研究についてお話していただいています。今回は、アルバータ大学のPhilip Currie博士、大阪市立自然史博物館の林昭次博士、沼田町化石館の田中嘉寛博士、国立科学博物館のTsai Cheng-Hsiu博士に講師としてご参加いただきました。また北大からも、ドイツからの研究者Dirk Fuchs博士、モンゴルからの留学生Chinzorig Tsogtbaatarさんが参加され、国際色の強い公開シンポジウムとなりました。講演のトピックも非常に幅広く、最先端の研究手法や化石発掘の方法、イカやタコなどの頭足類、ワニ類、恐竜類、鳥類、哺乳類の話まで盛りだくさんの内容でした。これらの講演の中には、北海道産の化石の話や、北大総合博物館のリニューアルオープン後に展示されるセイウチ化石などの話題なども含まれていました。シンポジウムの来場者も定員の70名をあっという間に超え、中には旭川や帯広など遠方からお越しいただいた方や、本州から海を越えて参加いただいた方々もいらっしゃいました。回を重ねるごとに、本シンポジウムの知名度が高まっていることが実感されます。



シンポジウムのポスター

これからワクワクするような古生物学の最新の研究成果を皆様にお届けできるよう、研究室メンバー一同頑張っていきたいと思えます。それでは皆様、「in 2016」でまたお会いできることを楽しみにしております。

田中公教
(理学院博士課程後期3年)



新聞にも取り上げられた北海道産のセイウチ化石の解説をする田中嘉寛博士。この化石は、7月から総合博物館にてお披露目される。



日本のワニ化石について講演する飯島正也氏。総合博物館のマチカネワニの展示も新装し、7月から公開される。

CISEサイエンス・フェスティバル 2016 in チ・カ・ホ ~生きものたちの北海道~

●2016年1月23日・24日



サイエンス・フェスティバル会場風景

CISEサイエンス・フェスティバルは、2012年に科学技術振興機構(JST)科学コミュニケーション推進事業「ネットワーク形成地域型」の助成によって作られた札幌周辺の自然史系博物館・などの社会教育施設からなるネットワーク(CISEネットワーク)が主催するイベントです。2013年からCISEネットワークの活動内容や協働開発したトランクキットなどの展示・紹介を行っています。

2016年1月23日・24日には、第4回目になる「CISEサイエンス・フェスティバル2016 in チ・カ・ホ～生きものたちの北海道～」を開催し、施設や団体による展示・体験教室の他に、絵本作家あべ弘士さんをはじめとしたゲストによるステージ・トークショーも実施しました。参加者総数はのべ7,000人に達しました。

参加者アンケートの結果から、約70%の方が「このような活動に参加するのがはじめて」と回答していますが、95%の方が「自然や科学への興味が高まった」と答えています。また自由記述では「今後、このような機会をもっと増やしてほしい」との声が多数ありました。

札幌駅前通地下歩行空間「チ・カ・ホ」で実施することにより、札幌周辺のさまざまな活動を行っている自然史系博物館や環境関連施設がたくさんあること、そして、地域の自然に学ぶ機会がそれらの施設によって提供されていることを、多くの方に知っていただける事業となっています。

菊田 融
(資料部研究員)

ポプラ三味線&ポプラチェンバロセミナー

Let'sしゃみチェン! ～ポプラでつながる和洋の楽器～

●2016年3月21日

北海道大学情報教育館3階
スタジオ型多目的中講義室



甲地さん、手にしているのがポプラ三味線

2004年の台風による倒木から作られたおなじみポプラチェンバロは、総合博物館耐震改修工事中、北大構内の情報教育館の一室でグランドピアノの隣にひっそりと置かれ、ボランティアメンバーによるメンテナンスが続けられてきました。このチェンバロと時を同じくして作られたのがポプラ三味線ですが、博物館の片隅で十年間も眠り続け、日の目を見る機会がありませんでした。今回、お世話になった情報教育館から戻る前に、この場所での和洋ジョイントセミナーが企画されました。

第一部の演奏と解説を担当した甲地利恵さん(北海道博物館アイヌ民族文化研究センター)によると、白木の三味線は珍しく、「色白美人」だとか。三味線の構造や特徴について、大変わかりやすくお話ししながら小粋な小唄もまじえて、眠りからさめた「ポプラ姫」の音色を披露してくれました。第二部は新妻美紀さん(チェンバロボランティア)による演奏と解説。しばらくお休みしていたチェンバロコンサートですが、変わらぬみやびな響きを聞かせてくれました。和洋の対比もさることながら、庶民の楽器だったという三味線に対して、貴族の楽器という対比もおもしろいものでした。第三部では二つの楽器のコラボで、イギリス古謡から「都ぞ弥生」まで、和洋のハーモニーを楽しみました。

閉演後も多くの聴衆がチェンバロと三味線を取り囲み、演奏者に質問したり、楽器に触れてみたりして、新装後の博物館でのコンサートへの期待も感じられました。

津曲敏郎
(資料部研究員・文学研究科特任教授/北方民族言語学)

水産科学館 水産生物標本館の竣工式

●2016年5月20日

函館キャンパスにある総合博物館分館の水産科学館水産生物標本館の建物(1960年建造)は、老朽化に伴い2015年度に建替えられました。新しい水産生物標本館は地上1階建ての建物で、全面に標本を収納する移動棚を設置しています。また標本館内には、教員室、コンピュータ室と作業室も併設しています。この建替えによって標本の収容能力は大幅に増え、標本の管理・利用がとて効率的で便利になりました。水産生物標本館には世界中から集められた魚類標本約23万点、プランクトン標本約33000点、海産無脊椎動物標本約4000点のコレクションが保管されています。そのコレクションの中には新種を記載した際に基となった標本(タイプ標本)が約1200点含まれています。これらの標本は北海道大学総合博物館のコレクションとして、学内の研究者・学生だけでなく、世界中の研究者に利用されています。



テープカットの様子(左から、矢部前水産科学館長、宮下副研究員、中川総合博物館長、今村水産科学館長)

水産科学館水産生物標本館の竣工式の記念式典は、2016年5月20日に水産科学館別館で行われました。式典には総合博物館関係者と大学院水産科学研究科の職員が参加しました。式典では総合博物館の中川光弘館長の挨拶の後に、水産科学研究科の安井肇研究科長と前水産科学館長の矢部衛特任教授から祝辞を賜りました。その後の内覧会は水産科学館の今村央館長の挨拶の後に水産生物標本館に移動し、中川館長、今村館長、宮下和夫水産科学研究科副研究科長、矢部前館長によるテープカットが行われました。その後、河合俊郎助教により標本館内部が案内されました。祝賀会は会場を水産科学研究科のマリンサイエンス創成研究棟に移して、開催されました。祝賀会では中川館長の開宴挨拶、今村館長の挨拶と祝杯の後に、祝宴が行われました。1時間30分ほどの祝宴の後に、矢部前館長の乾杯で閉宴となりました。

河合俊郎

(研究部助教/魚類系統分類学)



内覧会にて標本庫を案内

重要文化財「札幌農学校第2農場」 屋内公開のご案内

札幌農学校第2農場は、クラーク博士の大農経営構想により、一戸の酪農家をイメージした北海道開拓の模範農場として発足しました。明治10年に建設された日本最古の洋式農業建築である模範家畜房(モデルバーン)と穀物庫(コーンバーン)を有し、日本農業近代化のモデルとして畑作・酪農技術向上に寄与した当施設は、国の重要文化財、北海道遺産などに指定されています。

冬期間の屋内公開休止を終え、4月29日(金・祝)より、模範家畜房・穀物庫・牧牛舎内の一般公開が始まっています。施設内には、明治初期に欧米から輸入された畜力用農業機械や初期の農用原動機とトラクタ、日本全国の鍬(くわ)など、農業機械技術や北海道開拓の過程を語るうえで貴重な資料が展示されています。



●公開情報

屋外公開 8:30~17:00 通年公開
屋内公開 10:00~16:00

(模範家畜房・穀物庫・牧牛舎)
屋内公開期間:
4/29~11/3・毎月第4日曜日休館

●所在地

札幌市北区北18条西8丁目
(北海道大学札幌キャンパス内)
地下鉄南北線北18条駅より西方向に徒歩8分

第2農場のホームページが新しくなりました <http://www.museum.hokudai.ac.jp/sapporo-agricultural/index.html>

平成27年度後期 記録

平成27年10月から平成28年3月までに
行われたセミナー・シンポジウム

バイオメテックス市民セミナー

「生物と材料のシンフォニー」

バイオマテリアルと境界科学」

赤澤 敏之(北海道立総合研究機構 工業試験場 材料技術部 研究主幹)

日時:10月3日(土) 13:30~15:30

参加者:30名

北大総合博物館主催土曜市民セミナー

道民カレッジ連携講座

「深海魚場開発調査で得られた魚類

～インドネシア沖インド洋～」

河合 俊郎(総合博物館 助教)

日時:10月10日(土) 13:30~15:00

参加者:81名

バイオメテックス市民セミナー

「昆虫腸内菌の生き様に学ぶ」

出川 洋介(筑波大学 菅平高原実験センター 助教)

日時:11月7日(土) 13:30~15:30

参加者:25名

北大総合博物館主催土曜市民セミナー

道民カレッジ連携講座

「地球深部にひそむ隕石をさぐる」

山本 順司(総合博物館 准教授)

日時:11月14日(土) 13:30~15:00

参加者:101名

バイオメテックス市民セミナー

「骨粗鬆症の病態から学ぶ

強い骨の構造と質」

木村・須田 廣美(千歳科学技術大学理工学部応用

化学生物学科 教授)

日時:12月5日(土) 13:30~15:30

参加者:38名

北大総合博物館主催土曜市民セミナー

道民カレッジ連携講座

「恐竜の鳥類化 一脳、内臓、翼の進化」

小林 快次(総合博物館 准教授)

日時:12月12日(土) 13:30~15:00

参加者:300名

北大総合博物館主催土曜市民セミナー

道民カレッジ連携講座

「日本海は進化のゆりかごー海藻と貝形虫ー」

阿部 剛史(総合博物館 講師)

日時:1月9日(土) 13:30~15:00

参加者:80名

バイオメテックス市民セミナー

「人間とフジツボ」

室崎 喬之(旭川医科大学医学部化学教室 助教)

日時:1月11日(月・祝) 13:30~15:30

参加者:40名

バイオメテックス市民セミナー

「バイオメテック材料の開発:

微粒子が拓く省エネルギー型ものづくり」

藤井 秀司(大阪工業大学工学部応用化学科 准教授)

日時:2月6日(土) 13:30~15:30

参加者:42名

北大総合博物館主催土曜市民セミナー

道民カレッジ連携講座

「北海道大学総合博物館所蔵

一昆虫標本について」

大原 昌宏(総合博物館 教授)

日時:2月13日(土) 13:30~15:00

参加者:66名

公開シンポジウム

「絶滅動物化石の最新研究 in 2016」

越前谷 宏紀(総合博物館 資料部研究員)

榊山 匠(理学院修士課程)

Dirk Fuchs(理学研究院院学術研究員)

吉田 純輝(理学院修士課程)

飯島 正也(理学院博士課程)

高崎 竜司(理学院博士課程)

林 昭次(大阪市立自然史博物館)

Chinzorig Tsogtbaatar(理学院博士課程)

小林 快次(総合博物館 准教授)

Philip Currie(アルバータ大学)

田中 公教(理学院博士課程)

Tsai Cheng-Hsiu(国立科学博物館)

田中 嘉寛(沼田町化石館)

日時:3月5日(土) 13:00~17:00

参加者:100名

北大総合博物館主催土曜市民セミナー

道民カレッジ連携講座

「記憶の中の科学館

～50年前から紡がれる科学館体験～」

湯浅 万紀子(総合博物館 准教授)

日時:3月19日(土) 13:30~15:00

参加者:69名

バイオメテックス市民セミナー

「昆虫は体長より長いペニス

どう動かすのか?」

松村 洋子(キール大学・慶応大学 学振特別研究員)

日時:3月20日(日) 13:30~15:30

参加者:50名

平成27年10月から平成28年3月までに

行われたバラタクソミスト養成講座

土器バラタクソミスト養成講座(初級)

小野 裕子(総合博物館 資料部研究員)

日時:10月3日(土) 定員:10名

対象:高校生以上(参加者9名)

野外採集・地質見学会

松枝 大治(総合博物館 資料部研究員)

日時:10月10日(土)~11日(日) 定員:20名

対象:中学生以上(参加者21名)

きのこバラタクソミスト養成講座(初級)

小林 孝人(総合博物館 資料部研究員)

日時:10月24日(土) 定員:10名

対象:中学生以上(参加者10名)

化石バラタクソミスト養成講座(Jr.)

越前谷 宏紀(総合博物館 資料部研究員)

日時:11月7日(土) 定員:10名

対象:小学3年生以上・中学生・高校生

(参加者10名)

鉱床バラタクソミスト養成講座(初級)

松枝 大治(総合博物館 資料部研究員)

日時:12月5日(土)~6日(日) 定員:10名

対象:中学生以上(参加者18名)

昆虫バラタクソミスト養成講座(初級)

大原 昌宏(総合博物館 教授)

日時:12月19日(土)~20日(日)

定員:12名

対象:小学3年生以上・一般(参加者12名)

岩石バラタクソミスト養成講座(初級)

在田 一則(総合博物館)

日時:1月30日(土) 定員:15名

対象:中学生以上(参加者15名)

昆虫甲虫バラタクソミスト養成講座(上級)

講師:大原 昌宏(総合博物館 教授)

日時:2月20日(土)~21日(日) 定員:12名

対象:中学生以上(参加者12名)

平成27年10月から平成28年3月までの
主な出来事

10月15日 プレ小展示 I「ランの王国」開催
(~11/5)

10月27日 Philip Currie(フィリップ カリー)
特任教授 着任(~3/10)

3月10日 プレ小展示 II「ランの王国」開催
(~3/24)

3月31日 矢部 衛 水産科学館長 退任
技術補佐員 大橋慎平さん
技能補助員 大橋優季さん
退職

◎化石

朝見寿恵, 荒山和子, 安 翔宇, 飯島正也, 池上 森, 池上秀紀, 石崎幹男, 池田雅志, 石橋七朗, 伊藤麻衣, 今井久益, 白田みゆき, 岡野忠雄, 尾上洋子, 角谷友美, 加藤利佳, 金内寿美, 木村聖子, 木村映陽, 久保孝太, 久保田彩, 近藤知子, 近藤弘子, 酒井 実, 榊山 匠, 佐藤美恵, 高崎竜司, 高野麻子, 田中公教, 千葉謙太郎, ツォグトバーター・チンゾリグ, 手塚麻子, 寺田美矢子, 寺西育代, 寺西辰郎, 時永万音, 内藤美穂子, 中井勇海, 中島重大, 長瀬のぞみ, 中野 系, 中谷内 奎, 八丁目清之, 八丁目文枝, 古井 空, 堀 睦, 前田大智, 森 淑子, 山下暁子, 吉田純輝

◎北大の歴史展示

寺西辰郎

◎展示解説

在田一則, 飯島正也, 石黒弘子, 石橋七朗, 河本恵子, 菅 妙子, 児玉 諭, 田中公教, 千葉謙太郎, 塚田則生, 寺西辰郎, 中野 系, 成田敦史, 西川笙子, 沼崎麻子, 濱市宗一, 村上龍子, 森 淑子, ロバート・クルツ

◎翻訳

ロバート・クルツ

◎平成遠友夜学校

大山圭也, 柿本恵美, 佐伯圭一郎, 城下洽子, 鈴木理花子, 田中敏夫, 中井玉仙, 沼田勇美, 村井容子, 牧野小枝子, 山岸博子

◎4Dシアター

今野成捷, 高山緋沙子, 田中公教, 田中裕子, 塚田則生, 平田栄夫, 福澄孝博, 牧野小枝子

◎ポプラチェンパロ

浅川広子, 石川恵子, 宇治美穂子, 白田みゆき, 小野敏史, 清水聡子, 野村俊哉, 高橋友子, 中村会子, 新妻美紀, 野中敏明, 野村さおり, 松田祥子, 雪田理菜子

◎図書

岡西滋子, 児玉 諭, 今野成捷, 齋藤美智子, 須藤和子, 高木和恵, 谷岡みどり, 田端邦子, 中井雅佳子, 沼田勇美, 久末進一, 鮎田久意, 星野フサ, 本名百合子, 宮本昌子, 村上龍子, 安田 正, 山岸博子

◎第二農場

石田多香子, 大林正枝, 城下洽子, 寺西辰郎, 成田千恵子, 西川笙子, 濱市宗一

◎ハンズオン

加藤典明, 今 布咲子, 嶋野月江, 鈴木理花子, 須藤和子, 沼崎麻子, 福澄孝博, 古田未央, 山岸博子

◎展示改訂(地学)

塚田則生, 三嶋 涉

◎水産科学館

井口詩織, 金子尚史, 川畑 達, 川原田峻平, 丸 世華, 菊地 優, 岸本早貴, 木村克也, 木村まい, 工藤怜子, 小林美水, 櫻井慎大, 佐々木嘉子, 島田英恵, 高岸愛実, 高橋雄大, 田中友樹, 棚橋広弥, 寺塚真奈美, 棚野秀平, 外山太一郎, 中原隆史, 堀内萌未, 三上大樹, 屋敷運香, 山中 遼, 和田 茜

[表紙写真] 総合博物館リニューアルオープンちらしより



THE HOKKAIDO UNIVERSITY MUSEUM

北海道大学総合博物館

北海道大学総合博物館ニュース 第33号

編集: 山下俊介・福田美波

発行日: 2016年(平成28年) 6月30日

発行者: 中川光弘

発行所: 北海道大学総合博物館

所在地: 060-0810 札幌市北区北10条西8丁目

E-mail: museum-jimu@museum.hokudai.ac.jp

http://www.museum.hokudai.ac.jp/

デザイン・印刷

島山尚デザイン制作室